

南足柄市立福沢小学校

研究テーマ：主体的な学びを育てる授業

～自ら考え、友達と学び合うことで、学びの深まりを実感する～

1 実践の目的

これからの「予測困難な時代」において、学校では、自らの頭と心で向き合い、友達と協働して問題を解決することを通して、思考をし、判断をする人間の育成が求められている。児童のめざすべき姿の実現に向け、学校が一体となって校内研究に取り組むことをめざした。また、学校現場で世代交代が進む中、経験のある職員たちが、これまで築いてきた教育技術を積極的に伝え、そして、ICT機器の活用など新しい技術なども取り入れながら、教育活動を行っていききたい。

2 実践の内容

1 校内研究の方向性の確認

本研究の仮説を、「学び合い等を通して、課題に対しての深まりを実感することによって、児童の主体的な学びを育てることができる。」と設定した。

(1) 研究の方向性や研究テーマについての共通理解を図り、児童のめざす姿をより具体的かつ明確にすることによって、教員同士、同じ方向を見て研究を進めていけるようにした。(下図参照)

(2) 研究テーマをもとにした、児童への事前調査。

(3) 事前調査を生かした授業実践。

(4) 研究授業をし、協議の柱に沿って協議を行い、手立てに対しての有効性や課題を明確にした。

2 授業実践より

(1) 子どもたちから生まれた疑問をめあてとして設定

単元の導入では、教師がファシリテーター役を担い、多くの児童と関わりながら「めあて」を設定することができた。そのことにより、これから「何をするのか？」についても、丁寧に扱うことができた。

また、課題解決の糸口となる既習事項についても、授業記録を丁寧に分析することで、導入時の児童の学習状況を確認することができた。

(2) 学びの深まり

児童の学習の振り返りから、高学年としての学びの深まりの姿を捉えた。学び合いを通して、児童は最初の考え方の不十分さを理解するとともに、仲間の意見をきっかけに思考を広げることができていた。

思考の深まりの場面を教師が捉え、児童に伝えることで喜びを感じていた。一方、教師は、児童の発言や振り返り、学習感想を見ることで、

「学びの深まり」とは…

低学年における学びの深まり

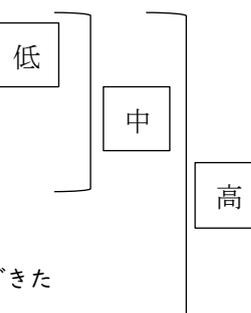
- ①分からないことが分かるようになった
- ②自分にはなかった新しい考えを知ることができた

中学年における学びの深まり

- ③複数ある方法から、よりよい方法を考えることができた
- ④他の教科や日常生活への活用を考えることができた

高学年における学びの深まり

- ⑤ある考え方が適切ではないということを理解することができた
- ⑥2つ以上の知識を繋げて考えることができた



思考の深まりの場面を教師が捉え、児童に伝えることで喜びを感じていた。一方、教師は、児童の発言や振り返り、学習感想を見ることで、

一人一人について、評価することができた。

3 ICT機器の活用

校内研究の公開授業の一つに ICT 活用を位置づけ、授業における学習者用タブレットや授業支援ソフト等の具体的な活用法について研究を進めてきた。一方で、活用が進むにつれ、児童のタブレット操作や技能の習熟に個人差が現れるなど、課題も明確となった。児童の発達段階に合わせて、各学年でどの程度までタブレットを扱えばよいかを整理し、系統立てて指導できるよう、タブレットの活用年間実践プランを作成した。ICT 推進委員会を中心に、本プランを定期的に見直ししながら、指導の充実を図っている。

4 家庭学習の取組

授業だけでなく、家庭など様々な場面で児童の主体的な学びが育まれるような環境の工夫が必要である。そのために、児童が取り組んだ自学習を共有できるスペースを各学年の廊下等に設け、互いの自学習の取組を自由に見られるようにした。

3 実践の成果

1 全国学力・学習状況調査 教科に関する調査結果から

国語については全国平均をやや上回っており、改善傾向にあると考える。また、無回答率が低かったことから、「課題に対して、知的な興味をもって、さまざまな方法で粘

り強く結論を導き出そうとする」力の育成をめざした取組に対しての一定の成果を感じられた。

2 児童質問紙の結果の変容から

4月に実施した全国学力・学習状況調査における「児童質問紙」について、10月にも改めて実施し、研究に関わる質問内容に対する回答がどのように変化したかを分析した。質問「学習した内容について、分かった点や分からなかった点を見直し、次の学習につなげることができていますか」については、肯定的に回答した児童が 8.5 ポイント上昇した。授業を通して、課題への向き合い方が育ち、成果となって表れたものと考えている。(下記表参照)

4 今後の展開

研究テーマに基づき、「校内研究」を中核に据え、継続的に取り組んできたことで、児童が主体的に学ぼうとする姿が、教育活動全般で見られるようになっている。

今後も、6学年で実施する「全国学力・学習状況調査」や3～5学年で実施する「総合学力調査」の結果分析等を基に児童の学習への意識改善を図っていく必要がある。そして、算数科で行っている研究のねらいを他教科、日常のさまざまな場面へ広げる意識を教師が明確にもつことで、児童の課題となる力を効果的に育てていきたい。

質問 「学習した内容について、分かった点や分からなかった点を見直し、次の学習につなげることができていますか」

〈上段：令和5年4月 対象：6学年児童〉〈下段：令和5年10月 対象：6学年児童〉

	当てはまる	どちらかといえば、当てはまる	どちらかといえば、当てはまらない	当てはまらない
本校4月	26.7	50.7	21.3	1.3
本校10月	33.8	52.1	9.9	2.8
神奈川県	29.8	46.7	19.0	4.4